

京都精華大学

2021年度 入学試験問題

座席番号

【小論文】(11月15日)

時間 14時30分～16時

【注意】

- 一、解答はすべて「解答用紙」に書くこと。
- 二、用具は黒鉛筆またはシャープペンシル(H、F、HB、B)、消しゴム、鉛筆削り用具のみとし、それ以外の使用は認めない。
- 三、出題に関する質問は受け付けない。

*この問題用紙は座席番号を記入の上、試験終了後返却すること。

【問題】

次の文章は、山崎亮著『コミュニティデザインの時代』（中公新書 二〇一二年）の一部です。文章を読んで、以下の設問に答えてください。

つながりが分断された社会

「孤立死なんて毎月ありますよ」とマンション管理会社の社員は軽く笑いながら話した。この会社、都内にかなり多くの管理物件を持っているそう。そのいずれかから、毎月のように孤立死の報告があるという。彼もかつては報告があるたびにショックを受けていたのかもしれない。ただ、そのとき僕の前にいる彼は、薄笑いを続けたまま毎月発生する孤立死のことを語った。その異常な事態を笑い飛ばすことでしか自分の精神状態を保つたまま仕事ができない、ということなのかもしれない。理由はどうであれ、こんな社員を生み出してしまうような社会はどこかが間違っている、と感じた。

マンションによっては壁の厚さが20センチしかない場合もある。壁にもたれながらテレビを観ている、その背中のみならず20センチ隣に、亡くなってから3ヶ月も気づかれずに放置されている老人が横たわっている。それに気づかず生活し続けられてしまうというのは、つながりのなさもここに極まれり、という気持ちにさせられる。わずらわしい人とのつながりはないほうがいいとはいえず、ほとんどの人がここまでつながりが分断された社会を生きたいと望んだわけではないだろう。

人とつながりにくい社会になったのか。確かにそういう側面もあるだろう。ただし、現代でもその気になれば人と人が知り合い、協力してものごとに取り組む機会はある。なくてもつくり出すことはできる。特に人口減少時代には、そのきっかけが増えるだろうし、増やさねばならないと感じる。

つながりのなかに生きる社会

後述するとおり、日本の総人口は減るし、ハード整備偏重時代は終わる。まちなことは行政にお任せ、とはいってられない時代がくる。となると、公共的な事業に住民の参加が不可欠になる。21世紀は住民参加の時代だということになる。

ところが、この住民参加は21世紀になって新しく登場した概念ではない。いまより人口がもっともっと少なかった江戸時代、日本の適正人口規模だと考えられる3500万人で日本の国土に人々が暮らしているときから、まちのマネジメントはそのまちに住む人たちによって行われていたのである。このことを「住民参加」と呼んでいたかどうかはわからない。

い。きっと「参加」という意識はなかっただろう。自分たちのまちのことを自分たちでマネジメントすることは「当たり前」なことだったはずだ。いまではほとんど見られなくなったが、家の前の道の掃除はそこに住む人たちがやったものだし、その道自体も地域に住む人たちが協力してつくったものだ。「道普請^{みちぶしん}注1」という言葉があるとおり、かつてはみんなで道をつくっていた。土を運ぶ人、水を運ぶ人、道を叩く人、石を積む人、食事をつくる人など、それぞれが役割分担して作業した。こうした作業を通じて、誰がどんな特技を持っているのかを相互に理解した。作業が終わったらみんなでお食事したり酒を飲んだりしてさまざまな情報を交換したり、楽しんだという。こうした作業や飲み会を通じて、地域のコミュニティはそのつながりを何度も確認し合っていたといえよう。

こうしたつながりが、地域に住む人たち同士の安心を生み出していた。具合が悪い人がいればすぐにわかったし、みんながお見舞いに訪れた。仕事がなくなった人がいたら、みんなが食事をおすそ分けしに行った。次の仕事を見つかるのも手伝った。当然、結婚相手も地域の人たちが紹介してくれた。家のなかに引きこもる人がいれば地域の人たちみんなが心配した。話し合って、家の外へ出てくるきっかけをみんなで作ったものだ。

ところが、道をつくるという作業を行政に任せるようになり、住民がまとまりをつくる機会がひとつ減ることになる。ほかに、家の屋根を葺く^ふ作業、冠婚葬祭など、住民が集まってやっていたことを誰かに任せるようになると、確かに便利な気がするものの、次第に個人がバラバラになり、人と人とのつながりが希薄化していくことになる。

「つながり」と「しがらみ」

こう書くとかつての地域コミュニティはいい点ばかりだったように感じるかもしれない。しかし、少し想像すればわかることだが、これほどのつながりは時として人を窮屈にさせる。自分が何をしているのかが周囲の人にすぐ知れ渡る。少し派手な格好をして出かければ、家に戻るころには近隣にその話が伝わっている。協同作業が多いため、しょっちゅう呼び出されるし、断りにくい。生活における自由はある程度制限されるわけだ。

日本の農村集落は特にこうしたつながりが強い場所だった。たとえば、江戸時代の年貢は組頭に対して定められるため、組頭は自分の組に所属する人たちから一定の米を集めねばならない。どこかの家が不作なら、ほかの家が少しずつ出し合っても規定の年貢をかき集めなければならぬ。どこかの家がサボって米をあまりつくらぬことになれば、ほかの家が迷惑するし、組頭も迷惑することになる。だから相互を監視することにもなる。あるいは隣の組に水を盗まれたら規定の米を納められなくなる危険性が高まる。水泥棒が出ないように水路を見張る係が必要になる。田んぼに水を入れる時期には、集落から交代で見張り番

を出さねばならない。そのほか、家の屋根の葺き替えにしても、結婚式や葬式にしても、ひとつの家族ではできない作業量である場合が多いので、地域に住む人たちが協力して執り行ってきた。こうした協同作業が多いため、自ずと地域コミュニティの結びつきは強固になった。

「お客さん化」する社会

ところが明治以降、年貢が廃止されて税金が個人に課せられることになった。組頭はみんなから税金を集める必要がなくなり、個人は国に税金さえ納めていれば隣人とながる必要もなくなった。さらに工業化が進み、農業ではなく工業に従事する人が増えた。農村部から都市へ出て工場で働くようになると、農業に比べて自宅の周りに住む人たちとの協同作業は驚くほど少ないことに気づく。個人の生活に干渉する人が少ないことに気づく。「これは暮らしやすい」ということになる。ドアを閉めれば隣の人が何をしても関係ない。誰ともつながらない時間を確保することができる。自由が謳歌できる。さぞかし快適だったろうと推察する（もちろん、隣人との人間関係から開放されたものの、かつてにも増して工場や会社に縛りつけられていることに気づく日が来るわけだが）。

こうなると、生活も個人単位になっていくし、まちからも「協同の風景」が消えていく。「道普請」なんて懐かしいことをやろうとする人はいない。道路というものは行政が専門家に頼んでアスファルトを敷いてくれるものだという認識になる。掃除も行政が頼んだ専門家がやってくれるものだという話になる。道路にヒビが入ったり落ち葉が溜まっていたりすると、住民は行政に電話して専門家を派遣してもらおう。行政はすぐに対応する。住民はどんどん「お客さん化」するわけだ。かつて、いくつかの役所に「すぐやる課」なるものが誕生したことがある。住民から電話があったらすぐに対応するという課なんだという。「すぐやるべきかどうか」をしつかり考えないと、電話すればすぐにやってくれるだろうと思う人が増え、住民はますます「お客さん化」する。「集客都市」という言葉が流行^{はや}った時期もあったが、お客さんばかりを集めた都市になリかねない。つくるとすれば「あなたと一緒にすぐやる課」だろう。主体的にまちへと関わる人たちの意識を取り戻さねばならない。

「活動人口」という考え方

日本各地で人口が減少している。「定住人口が減るなら交流人口を増やそう」という話になることが多い。つまり、お客さん人口を増やそうというわけだ。ところが、お客さんがたくさんまちに入ってくると、ゴミを捨てて帰る人たちが増えるということになる。本当にそ

れがまちの未来像としていいものなのかわからなくなる。定住人口が減るから交流人口を増やして何とかしようとするのもいいが、むしろ「活動人口」を増やすという手もあるのではないか。定住人口が減っても、市民活動などに関わる人たちが増えていけば、まちは豊かになるのではないだろうか。活動人口が増えれば人のつながりが増えることになり、孤立化していた市民がひとまとまりのコミュニティを形成することになる。まちの元気度合いを測る数値は定住人口と交流人口だけではなく、活動人口もあるのではないかと考えている。

隣人と協同して掃除すらしないから、近所に誰が住んでいるのかもわからない状態になる。その結果、引きこもりだとか孤立死だとか無縁社会だとかいうことが問題になってしまふ。誰ともつながらず、都市生活を謳歌していたつもりが、気づいたらつながりがなさすぎて「生きにくい」社会のなかにポツリと立っていたというわけだ。さらには、そんな孤独な家族に生まれる子どもがいて、彼らが成長してさらに孤独な社会をつくることになる。これが何世代か続いたのだろう。いまでは地方都市でもつながりがないことによる弊害が顕在化するようになってきた。孤立死は東京だけの問題ではなくなっている。

いいあんばいのつながり

しかし、この流れが変わろうとしている。理由はいくつかある。ひとつは「まちのことは行政にお任せ」とはいつていられない状態になってきたということだ。税収が減っているんだから、もう「いたれりつくせり」の行政はない。地域に住む人たちが力を合わせてまちのマネジメントに参加しなければならぬ。あるいは主体にならねばならない。もうひとつは、つながりのなさが行き着くところまで行って、逆に「もう少しつながってほしい」と感じる人たちが増えてきたということだ。日常的に無縁社会が話題になり、引きこもりや鬱うつや自殺や孤立死が社会問題となり、西日本と東日本で巨大な地震が起きた結果、多くの人たちがつながりの大切さを見直した。これを機に流れを変えなければならぬ。ちょっと特殊な100年間にできあがってしまった常識ではなく、その前にあった常識を参考にした「懐かしい未来」を共有しなければならぬ。「道普請」のように人とつながりながらまちをマネジメントする「まち普請」のあり方を考えねばならない。

とはいえ、「昔に戻ろう」というスローガンが必要なのではない。税制が変わり、ある程度生活も個人化された後のつながりを模索するのだから、人々がかつてのような強いつながりを求めているわけではない。しがらみの多い社会に戻りたいわけではない。現代を生きる人たちにとって、つながりがなさすぎるのは生きにくいが、つながりがありすぎるのも生きにくいのである。どれくらいの強度であれば快適なつながりなのか。僕たちはいま、コミ

ユニティデザインという方法を使って「いいあんばいのつながり」がどれくらい強度なのかを探っているところだ。自由と安心のバランスを調整しながらコミュニティデザインに取り組んでいるといえよう。

注1 道普請・・・道路を直したり、建設したりすること。道路工事。道づくり。

設問 1

筆者は文中で、社会において人と人とのつながりが希薄化・分断化していった要因をいくつか具体的に述べている。筆者が考える、それらの要因について二五〇字以内でまとめてください。

設問 2

「つながりが分断された社会」について、現状をやむを得ないと受け入れるか否か。文中で使われている「つながり」と「しがらみ」の両方のキーワードを用いて、六〇〇字以内であなたの考えを述べてください。